

なぜ活動に参加するのか

ボランティアの声



きょうかさん

バスカフェでのアウトリーチや
事務のお手伝いをしています。

—Colaboとの出会い、関わるきっかけは？

私は高校のときに在日朝鮮人の先生に出会って、日本の植民地主義や民族差別について学ぶ機会を得ることができました。当時自分の周りにも、在日朝鮮人の人たちもいたけど、私は全然何も知らなかったんで、そんな自分の立場ってなんだろうと漠然と考えていました。その後、大学院などで日本軍「慰安婦」問題を勉強するなかで、現代の性暴力やジェンダーの問題にも関心を持ってきましたが、現代の問題は自分でも見えていないことが多かったと思います。

2016年に「『買われた』展」をSNSで知って、行きたいと思ったのですが、内容的に男性がいる場で展示を観るのが嫌だなと思っていました。そんな時に、Colaboが女性限定の時間をつくると投稿していました。そういうことに敏感に活動している団体って他にはないな、すごくいいなと思ったのが最初の出会いです。

翌年、韓国のバスカフェの視察に一緒に行き、「日本でバスをやるなら絶対に私もボランティアしたい!」と思いました。それから、「バスいつ始めるのかな?」と思って、ColaboのSNSでバスを購入したという情報

なども気にして見ていました。

その後、アウトリーチのボランティアは、家出体験研修(支援者養成講座)の参加者から募ると発信していたので、「家出体験をやり切れるかわからないけど、ボランティアしたいから行くしかない!」と参加しました。

—家出体験研修は、どうでしたか？

座学の研修を受けた後、家出体験の時間になって、くじ引きで自分の置かれている状況の設定が配られるんですね。Colaboとつながる女の子たちが実際に経験した虐待や、家出にいたるまでの経緯、そのときの持ち物や所持金などが一人ひとりに設定されます。私は「所持金0円。裸足で家を飛び出した。スマホはなし」という設定だったんです。今日一晩、この条件で家に帰れない設定で過ごしてみてくださいと言われて「本当に放り出されるんだ」と、結構びっくりしました。

他の参加者の方たちは固まって動いていて、一緒にファミレスで朝まで過ごしたり、お金のない設定の方が、お金を持っている方に夕食をおごってもらったりしていたみたいでしたが、私は初対面の人と一晩一緒に

いるのは辛いなと思って、さまよいました。

家出体験はやって良かったと思います。私はそういう経験は全然なかったので、「家出したら図書館行って時間潰せばいいじゃん」くらいに思っていたんですが、実際に行く先がないとなると、何かに集中することもできないし、私が体験したのはその1日ですけど、すれ違う人たちが今までと全然違って見えました。「あー、この人には帰るところあるんだろうな」とか「この人もしかして帰るところないのかも」とか、人々を見る目線も変わってくるし、安心して帰れる家がないとはどういうことなのか、それまでまったく想像できなかったのも、短いたった1日の経験ですけど、あれがなかったら私には女の子たちの状況を想像することもできなかったと思います。あの体験は本当に私が活動する上では、すごく良かったと思っていますし、こういう活動に関わる人たちは、絶対に参加したほうが良いと思います！

—Colaboの雰囲気を一言で表すと？

家ではないけど施設でもないし、ただの居場所ってわけでもない。ある女の子が「第二の家」と言っていたんですが、本当にそういう感じだなあとします。

初めてColaboに来たときは、「ここ？」みたいな感じだったんです。本当に地域の中に溶け込んでいて、地域の人との関わりも大切にしながら、女の子たちが暮らしたり顔を出したりする場所をつくっているのがすごく意外でした。もっと「施設」みたいなイメージなのかなと思っていたんですが、女の子がソファで、でーんと寝ていたり、想像とは違ったけど、本当に女の子たちの居場所になっているというか、素敵だなって思いました。

私にとっても特別な場所です。そのとき私は「なんか違うかも」と思いながら就職先で働いていたので、Colaboにいるときはすごく生き生きしていましたね。共に闘う人がいる空間って大事ななと思います。

—どんな想いで活動していますか？

性搾取をなくしたいという、この社会に対する怒りです。Colaboではそれを共有できる人たちと共に活動していると思います。この社会の状況は我慢でき

ないですね。バスの活動をするなかで、私が働いて普通に生活しているだけでは見えない光景が見えてきて、男性のために女性が消費されている搾取の構造を本当にまざまざと見せつけられて、許せないっていう思いが強いです。

アウトリーチの活動中も、女の子たちと歩いていると、ホストやスカウトにしつこく声をかけられて、本当は反応するのも嫌なんですよ。最初は丁寧に「行きません」と対応していましたが、女の子たちと一緒に、どうやって追ひ払うか、早く諦めてもらうかと色々考えて、でも結局最近では「うるさい！興味ない！」とかマジ切れしながら言うようになりました。

—活動する上で、心がけていることはありますか？

バスをやって決めた時も、私はボランティアなのでColaboの雰囲気を壊したくないと、すごく気にしていました。だから、バスの活動中に先に帰るときも、風のように去る、みたいな感じを心がけていました。私は「ボランティア」というと、どうしても上から目線で「やってあげてる」みたいなイメージがありました。でも、家出体験研修などを受けて、やっぱりColaboをいいなと思ったのは、「Colaboの活動は支援じゃない」と言っていますけど、女の子と平等に、対等な関係性を大切にしていることです。そういうColaboだから、私もボランティアとして関わることで「自分の満足感を得る」みたいな活動はしなくなかったです。

私が関わり始めた頃のこと、心に残っていることがあります。ある女の子に「きょうかさんって大学出てんの？」と聞かれたんです。そのとき、私は心のなかでは、当たり前じゃん、くらいに思ってた、「え？出てるよー」と返してしまったんです。でも、その後、それって当たり前じゃなかったなって、すごく反省しながら帰りました。そういう自分の立ち位置に、もっと自覚的にならないと女の子たちを傷つけるなと実感したし、活動の中でそのように多くのことを女の子たちから教えてもらいました。

今まで、日本軍「慰安婦」問題を考えるなかで、日本人の女性としてこの問題にどう向き合うのかということに常に突きつけられ、自分の立場というものに

自覚的であろうと考えてきたつもりでしたが、Colaboに来て、それでも全然足りなかったんだと改めて考えさせられました。

—声かけで女の子たちと一緒に活動して、どうでしたか？

はじめはバスのアウトリーチは大人だけでやっていましたが、女の子たちが活動を始めたら、声をかけられた女の子たちの反応が全然違いました。一緒に活動するなかで、声かけチームの女の子たちがすごく変わっていくのも近くで見ている、「買春男がクソだよね」という話を歩きながらする時間も、活動として大切だったと思います。

女の子たちに気分の波もあるから、一緒に活動するときに自分がどうしたらいいのか難しいこともありました。女の子たちにやる気がないときも一緒にいて、でも私が引っ張るのも違うのかなとか、本人に任せた方がいいのかなと思ったり。そういう日は「やる気がないなら帰るな」とか「やりたいならやる、やりたくないならやらなくていい」とColaboでは女の子たちにはっきり言うと言って、「結構言うんだな」と思いました。でも、次のときに、女の子たちも「前はダメダメだったから、

今回は頑張る」と言っていたり、やる気がちょっと上がっているようなことが多くありました。バスの声かけは本当に「活動」って感じだなと思いました。

—性搾取が放置されているこの状況に対して、これからどう取り組んでいきますか。

今まではColaboの活動を一緒にすることで、この社会を変えるために活動してきましたが、これから留学するためColaboの活動から離れるので、これからは「黙らない」ようにしていきたいと思っています。Colaboには共通した思いを持って闘う人たちがいますが、社会のなかではそうではないので、なにかあれば、恐れず、しっかり発言していくことを最低限守っていききたいと思います。あとは、バスカフェを通して見たことや経験したことを周りに伝えていくことから始めたいです。

日本に生きる日本人として、こんなに課題があるのに日本を離れることは、逃げるような後ろめたさも少しあるのですが、日本にいたただけだと見えないものもあるはずなので、視野を少し広げて、世界で闘っている人たちの闘いも見てみたいという気持ちがあります。それはいつか日本の社会を変えるために、必ず還元したいと思っています。



野口さん

バスカフェでのアウトリーチを担当しています。

—Colaboとの出会い、関わるきっかけは？

私が働いている会社が実施している研修で、Colaboの「夜の街歩きスタディーツアー」に参加したことがきっかけでした。バスカフェにも関心があり、なにかお手伝いできることあればと思っていました。2020年にコロナで緊急事態宣言が出たとき、ボランティアの方が来られなくなって人が足りないと聞きして、活動に加わりました。

仕事でミャンマー、ベトナム、タイのプロジェクトを担当するなかで、日本で被害にあった方もたくさんいて、日本の現状に危機感を持っていました。普段仕事で支援を行なっている途上国へは、国際機関やNGOなどから支援が入りますが、日本は「私たちは先進国ですよ」という顔をしているから、外からの支援が入らなかったり、他の国からの忠告や勧告を聞こうとしないところがあると思っています。また、性教育もほとんどされてなく、「嫌なことは断っている」とか、健康的な人間関係ってどんなものかなど、基本的な人権や人権に基づいた性教育も全然されていない。そんななか、おじさんたちの都合のいいように歪められた性の情報が流れていて、女の子たちが被害に遭っている。この社会で自分がなにも行動を起こさなかったら、問題が放置されたままになってしまうという想いもありました。

特に緊急事態宣言中に街で出会う子たちは、本当に大変な状況にある子たちばかりで、私がコロナにかかるリスクよりも、その子たちが路頭に迷ったり、被害にあうリスクの方が大きいと思って続けてきました。

—どんな想いで活動していますか？

おじさんたちから被害に遭う女の子を1人でも減らしたいという想いです。声かけの活動をしていると、私たちが声をかけたいと思う女の子たちに、性産業の業者や買春者などの男性が次々と声をかけているので、それより早く声をかけたいと思っています。

はじめは、どの子に声をかけたらいいかわかりませんでした。数か月活動していくと、だんだんと気になる子たちに気付けるようになりました。声をかけたときの反応から、「この子に声をかけてよかったかも」と思う時もあるし、「この反応だったら大丈夫だな」と思ったり。「この子本当に10代なの？」というような大人びた子もいるし、10代だと思って声をかけたら20代や30代だったこともあって、声をかけてみないとわからないなと思っています。

私たちが声をかけて、すぐについて来てくれたり、

警戒心が全然ない子は、バスに来てくれるのは嬉しいけど、他の人たちに声をかけられたときも、ついていってしまいそうで心配になります。本来はそういう子たちも、被害にあわずに安全に過ごせる社会にならないといけないのですが、私もColaboで活動始めるまで、歌舞伎町に足を踏み入れたことがなく、こんなに女の子たちを狙った大人が沢山いることも知りませんでした。最近では、個人的な用事で新宿に来て「あの子ちょっと気になるな」とか、業者や買春者の男性の動きが目につくようになりました。

—活動する上で心がけていることはありますか？

女の子たちから無理やり話を聞こうとしないように心がけています。根掘り葉掘り聞かれるのは自分も嫌だから、話したかったら向こうから話してくれるかなと思って、あえてなにも聞かないようにしています。街で出会う女の子たちもだし、声かけで一緒に活動している女の子たちにも、できるだけ自然な感じで、特別扱いせずに接することができるようにと思っています。

女の子たちと日常の話をしているときに、「ちょっと危ないことしようとしてるな」とか「それってデートDVじゃない？」ということもあって、そういうときは押し付けにならないように、でもできるだけ安全で健康的に過ごせるように、なにをどう伝えたいのかなと考えることもあります。

—Colaboの雰囲気を一言で表すと？

『フラット』だと思います。女の子たちに対しても上下関係がないことを、いつも感じています。

—活動を通して感じている社会的な課題と、それに対してどう取り組んでいきたいですか？

社会全体として、女の子たちを搾取することが正当化されていて、女の子たちが被害に遭うことが許容されたり、問題が放置されていて深刻だと思っています。この現状を変えるために、声かけの活動を続けていきたいですが、女の子たちを狙うおじさんたち、需要を生み出す側をどうにかしないと根本解決に

はならないと思っています。日本ではジェンダー差別が根強かったり、性加害を擁護したり被害者を非難する声が多かったりと、しんどいと思うことも多いので、自分の精神衛生上は、海外に暮らしたほう

が良いなと思うのですが、「どう考えても日本の状況が一番やばいよな」と思っているので、やるなら日本で活動しなきゃと思って取り組んでいます。

内田さん 大工仕事やバスカフェの警備を担当しています。

—Colaboで活動するきっかけは？

2015年にColaboがはじめて一時シェルターを作るというときに、Facebookで床を貼れる人を探しているという投稿があって、大工仕事が好きだから「行く行く」と名乗り出ました。仁藤さんたちと、ホームセンターに一緒にいって、床材を選んだりしてね。まだ床も貼っていないのに中学生の子が、虐待から逃れるために駆け込んできて、その子も一緒に作業しましたね。床を貼れるのはおまけなんだけど、仁藤さんの本や投稿を読んだときに、「ひょっとしたら自分のクラスにもいたのかな」と思うようなことがあって、自分が高校の教師をやっていたときに、Colaboに来るような子を見逃していた可能性があるんじゃないかって思ったんですよ。「ただ休みが多い子」とか「家出しちゃったしょうがない子」みたいな見方しかしてなかったというか。そういう困難を抱えている子がいるということを認識していない教師たちの状況（自分も含め）に驚き、Colaboの活動は支えなきゃと思いました。バスにくる子たちはいろいろで、表情が明るい子もいれば、いかにも死にそうみたいな感じでくる子もいるし、聞き取ろうとしないと、表面的には分からない部分がある。いかに聞き取るかっていうのは、学校のなかでも難しいんですよ。

—どういう想いで活動していますか？

今の日本社会では「家族」ってすごく仲良くみんな

で助け合うイメージが流布されているけど、その物語をもう少し揺さぶらないとだめだし、高校教師がそこをちゃんと認識しないと不幸が増えるだけだと思っています。虐待を受けている子の対応は、教師1人ではどうにもならないことが結構ある。その場合にどうやって、学校が外部の専門家と繋がればいいのかも考えなくてはいけない。現場で志のある教師の何人かが、先駆的な実践をしています。文科省は基本的に「個別対応」で、個別に問題が表面化しなければOKみたいなところがあるから。学校のなかでも、虐待がもとで問題行動をしてしまう子は、問題行動を起こす子、問題のある子として扱われる。そこをなんとか、問題を外在化させ、家族との関係、学校や教師との関係のなかでどう関わっていくのか、もっと考えていかなくてはならないと思っています。

問題が見えたときに、何とか支えなきゃと思う教師と、蓋をして「問題をおこすお前が悪いからだ」と問題を内在化させてしまう教師に分かれるんです。そういう対応しかできない教師が、むしろ多いんですよ。それは懲罰主義ともつながっていると思います。今、教職をとる学生向けの大学の授業では、揺さぶれる子を育てたいと思っているのですが、反応もいろいろでね。半年間の授業のなかで、どこまで揺さぶれるのか。事実を持って揺さぶるのが一番大きいと思っているから、いつも仁藤さんには生徒指導論に講師として来てもらっています。大学生だとまだ揺さぶれるんですね。

この子は固いな、常識にとらわれすぎているなという学生もいるけれども、いろいろ話を聞いたり、応答を書いたり、実践していくなかで変わる子が多いです。それまで、「こうあるべき」「こうすべき」という文脈のなかでしか生きて来なかった学生は、「問題を起こすのは、問題を起こすやつが悪い」と、全てのことを自己責任のなかに押し込めようとしてしまう。

そういう教育は、2000年代に入ってから強化されたと思います。最大のきっかけは、教育基本法の改正と、それに基づく教育基本進行計画が作られた。それで教育行政が学校に、次から次へというんなものを持ってくるようになった。それは悪いことばかりではないですが、例えば性的マイノリティの生徒たちにどう対応したらいいのかということは、パンフレットを作って学校にポンと投げる。でもそこに書かれているのは、個別にどう対応したらいいのかだけで、実際には周りの子たちとの関係がうまくいかなければダメなんですよ。周りの子たちに、自分のことを話せる子が何人かでもできてくれば、自分のことも周りの子のことも理解して、だんだん広がっていくんですね。そういう関係性のなかでしか物事は変わらないんだけど、すべて個別対応で済ませようとする文科省のやり方、視点の欠落と学校現場の病理みたいなものがあると思います。

一学校の先生が、虐待されていたり、家に帰れない子がいると気付いても、管理職などに「踏み込むな。それは教師の仕事ではない」と言われて苦しんでいることもあります。

それはありえるでしょうね。今、教員が多忙化していて、あれもこれもしろと言われるなかで、虐待されている子にいろんな問題があったときににも、個別対応よりも、その子と周りの子との関係が改善してくることや、相互理解が進むかどうかのほうが、問題を解決できるかどうかについても、大きなかわりを持つと思います。ところが、そういうことに踏み込むことよりも、その子が問題を表面的に起こさないようにすることが大事になってしまう。とにかく排除し、中退させる。問題が起こったことを積み重ねていって「これだけ積み重なったから、はい、あなたバイバイ」って。それもね、教育基本法の改

正と前後して、規範意識の醸成という通知を文科省が出したんですよ。それをきっかけに、小さい違反でも寛容せず、厳しく罰して排除するゼロトレランスという考え方が全国に広がった時期があるんです。今はある程度、それは戻っていますが、その前から「問題を起こして何回か繰り返したら、お引き取り願う」みたいな決まりを作っていた学校はあったけど、それが広がってかなりひどくなりました。「余計なことをしないで、ちゃんと学校に来てる子に勉強させなさい」という文脈しかないんですよ。その前提として、親が家にいて、家では安心して暮らせるのが当たり前だという頭で動いているんですよね。家が居場所でない子がいるなんて意識をさらさら持っていない。そんなのその子の責任ではないんだけど、教師達にも、世の中の人たちにもそれがもっと知られないといけない。

学校そのものの状況の問題と、教師が問題を抱えている生徒にどういうタイミングで、どういう聞き方をするのか、そこに配慮があるかどうかも大切です。普段、「ふざけんなバカヤロー、俺の言うことを聞け」という態度をしてる教師じゃダメ。よく、傾聴のスキルとか言われるんですけど、スキルより、相手を理解しようとするかどうか、「今あなたは何に困ってますか」ということを聞く姿勢があるかどうかが大いではないですかね。話せるか話さないかは、そのときの状況や状態によりまよす。例えば家で、昨日親にボコボコにされてなんとか学校に来た子が、すぐに話せるかってね。普段から生徒の話を聞いてちゃんと応答するってことを、学期の初めからちゃんとやっていった教師のところには、問題を打ち明ける子が来るんですよ。でも、そういうことをしないで「俺の言うことをちゃんと聞くんぞ」ってことしかしてない教師のところには、誰も話しにいきませんよね。

大学の生徒指導論の授業では、最初に「支配と教育の違いは何かを考えてください」と必ず言うんです。案外意識しないし、わかってない人がいるんですよ。支配とコミュニケーション不全問題は、今の社会で大きいと思っています。明治以来積み重ねてしまった悪弊が、今ひどい形で表れているんじゃないかって。Colabolに来たときに「いいかお前らこうすべきなんだぞ」って話は一切ないから、そこが基本的には違うよね。

—Colaboと他の活動や団体との違いはありますか。

仁藤さんと稲葉さんの活動をかなり早い段階から見てきていますが、「おもしろい」って思っています。自分たちの出来ることをいろいろ考えて、いろんなところに関わりを作って、いろんな支援を引っ張りだしてくるでしょ？支援の引っ張り出し方がうまいな、と思って。Colaboの報告会なんかに行くとね、そういう人が集まってるもんね。

社会的活動のなかで、すごく有効性をもった活動だなとおもうんです。そして今の社会で一番必要だなと思う部分の一角に、Colaboがちゃんと根付き始めていて。それで、似たような活動をする人が今、いろんな地域であちこちに増えていますよね。世の中変わるんじゃないかな、まだ先は長そうですね。

Colaboでは、アウトリーチの活動なんかでも、女の子たちが参加していくじゃない？そういう風に広がりを作れるのはすごいなと思っています。学校で文化祭がいいものになるときは、最初は活動が小さくても、クラスのなかで広がっていくんですよね。広がるかどうかというのは、活動の中身の問題と、関係性の問題2つがある。それがうまくいくと、生徒がみるみる成長する。Colaboでは、大人だけが活動しているわけじゃなくて、一緒にやってる感じがいいよね。

—活動を通して、自分自身の変化はありますか？

自分自身の家族に対する見方や、日本にある性売買など、様々なことに対する見方が変わりましたね。秋葉原で、10代の女の子たちがぞろぞろ並んでいるのを最初見たときには、「ああお金が欲しいのかな」みたいな見方をしていました。自分のなかの、そういう見方はどんどん変わっていきました。歴史を勉強すると、日本が明治以来ずっと、性を政治的な道具、商売に使ってきた歴史が背後にあることも知って。男の、男性の性のありようが、すごく歪んでいるというのがだんだん見えてきたんですね。じゃあそれをどうするんだと考えて、まだ先が見えないけど、少なくとも日本の学校の性教育はとんでもなく低いから、今度そう

いうことも教材にできるかなと考えたりしています。

—Colaboの活動から見える社会的な課題と、それに対してどう取り組んでいきたいですか？

私は学校の教師は現役を退いていますが、学校の教師が生徒から話が聞けない。そして教師同士も、子どもたちについて情報交換、意見交換をして十分話をする事ができない状況をいかに変えていくのかが、今の自分の課題だと思っています。教師には「生徒に教えなければいけない」と、一方的に話すのが教えることだと思い、支配的な意識を持っている人が多くいます。でも、人間が一方的に話を聞いて学習するなんてことはないんですよ。一瞬はあるかもしれないけど。自分で考えてやりとりして、物に触って、実際にやってみて初めて、人間は学習するんですね。それをもっと理解されるようにしていきたい。

昔の教師のなかにも、それをわかっている人もいれば、わかってない人もいると思いますが、近代以降の時代の問題もあると思います。強い兵隊さんを作らなきゃいけない、国の生産力を上げなきゃいけない。そういう価値観に縛られている。だから全部教え込む。「これが正しいんだ」「こうあるべきなんだ」と教え込むことが原型になっています。それはだめでしょってことをもう少し広げたいです。現象としての問題をとらえて、「これはなんとかしなきゃ」「あれはなんとかしなきゃ」って考えるのではなくて、人と人とのコミュニケーションを学習の問題として捉えたり、歴史の問題として捉えている人はそれほど多くないんじゃないかな。

—これからのColaboに期待することはありますか？

いろんな人たちと交流しながら、Colaboと似たような動きがあちこちに広がっていくといいなと思っています。まだまだ、地域でなにかやろうとしている人たちはいると思うので、そういう人たちと緩やかにつながれるといいかなって思います。

私がColaboを応援する理由

応援者メッセージ

社会福祉法人 中央共同募金会 秋貞由美子さん

2016年に創設した「赤い羽根福祉基金」は、公的な支援制度の狭間にある複合的な課題に先駆的に取り組む活動を応援することを目的とした大型の助成金です。この助成先として、2018年度～2020年度の3年間Colaboを応援させていただきました。

Colaboは、「虐待、貧困などを背景に社会的に孤立し、街をさまよう10代の女性たち」を対象として、バスを活用したカフェを夜の街に停めて、10代の女の子たちが安心できる場を提供し、性暴力や犯罪に巻き込まれることから守る取り組みを応募されました。こうした10代の女性の課題は、当時あまり社会で認識されておらず、実践を通じて広くこの課題を社会に伝えとともに、支援手法を他へ広げてほしいと審査委員会から大きく期待が寄せられ、助成を決定しました。

社会的に孤立している10代の女性たちは、自ら助けを求めることが難しく、場合によっては自分自身が課題を抱えていることすら気づかずに、深刻な状況のまま地域で生活していることも少なくないと思われます。そうした女性たちがさまよう繁華街にバスカフェを設置して「アウトリーチ」し、積極的に支援につないでいくアプローチ方法が、審査委員会では特に評価されました。また、繁華街へ出向いて少女達に声をかける取り組みを応募時点ですでに展開しておられ、活動を展開する渋谷区、新宿区の行政とも連携がとれており、「バス」が加われば実施できる見通しが立っていたことなど、実施計画に具体性があったことも、助成決定する上で大きな理由となりました。

実際は、できあがったピンク色のバスを拝見して、

私たちの想像を超えたポップなデザインにちょっと驚いたのですが（笑）、しかしイマドキの女の子たちが来てくれる場にするためには、このぐらいの「かわいさ」が必要なのだなと納得しました。単なるカフェとして食事を提供するだけでなく、スマホの充電ができるようにしたり、服や生理用品などを持ち帰れるようにしたりなど、女の子の目線にたった、いわゆる「支援色」を前面に出さない工夫がされているところも、長く女の子の支援に関わってこられたColaboならではの特徴だと感じています。

Colaboやバスカフェの活動意義について、第1は、こうした10代の少女に焦点をあてて支援活動を展開していることです。自らの居場所を見いだすことができない、助けを求めることがむずかしい少女たちが、Colaboのバスカフェに出会うことによって、ほっと息をつくことができ、そこで悩みや課題を話すことを通じて必要な支援につなげることができる。これは申請主義が原則である現在の福祉制度ではなかなか対応が難しいことです。そして、活動状況のデータを可視化し、10代の女性が抱える課題とその支援の必要性について、マスコミやSNSなどを通じて広く発信され、啓発活動を展開している点も評価しています。

第2は、この活動を当事者運動として展開されている点です。Colaboでは、少女たちを共に社会を作る仲間として考えておられ、支援する/される関係性ではなく共に歩むことを大切にされています。そして、かつて当事者だった方が、今は支援者として活動に加わっておられるケースもあると伺いました。これは、「地域の人々による助け合いの募金」である共同募金

運動の理念とも相通ずるところであり、非常に意義深い活動だと考えています。

第3は、多くの人々や企業・団体の協力が得られていることです。バスカフェには、カフェのセッティングを手伝ってくださる方、食事を作ってくださる方、安全確保のための警備をしてくださる方や、食材や物品を寄付してくださる企業・団体など、多くのボランティアの方が参加されています。ボランティア、企業・団体など、様々な方の協力によって展開されている点も素晴らしいと感じています。

Colaboは、これまで「赤い羽根福祉基金」のような民間資金や寄付金、また行政のモデル事業の受託等を活用しながら活動を展開してられました。

2021年度からは、国の「若年被害女性等支援モデル事業」が「若年被害女性等支援事業」として施策化され、東京都が行うこの事業を受託されました。

虐待や困窮などを起因として孤立する10代の少女の課題は、東京都内だけでなく、日本全国に起きていることだと認識しています。こうした支援の取り組みが全国で展開されるよう、この取り組みをいち早く展開してこられたColaboには、その先達として支援ノウハウをまとめ、他へ広げる役割を果たしていただくことを期待しています。そして、厳しい状況にある少女たちが、ひとりでも多く、この社会でその人らしく安心して暮らしていくことができるよう、支援の輪が広がっていくことを願っています。

日本財団 花岡隼人さん

日本財団では、2017年度に活動を支援しました。若年女性の支援をしている団体は、日本では本当に少ないです。Colaboは今まで誰も取り組まない課題に取り組み、他にないアプローチの仕方やソーシャルワークをすごくやっていたので、注目していました。当時から活動を広めていくためにどうするかという課題がありました。コロナ禍で相談が増えて、いよいよまわらなくなってきたと聞いて、これを機に三年くらい腰を据えて、今までやってきたことを研究成果にまとめたらどうかということと、新宿にオフィスを構えて事務局職員を雇ったりするために2021年度から助成することになりました。

この課題って、みんながわかっているようで実際にはわかっていない。Colaboでは仁藤さんがすごく頑張って発信していて、なんとなく「大変な若年女性って多そうだよ」とみんな思っているけど、データもない。もっと多くの人が関心をもち理解していくためにも、今までの成果をまとめたり、問題の深刻さを数字で示すことが大切なのではないかと思っています。

Colaboの活動として特徴的なのは、夜の街でアウト

リーチをしていること。そして、ソーシャルワークをちゃんとやっていること。

シェルターもあって、例えば、怪我をしている人に対してきちんとした絆創膏の貼り方も知っているけど、診断をして、何科がいいのか、そこにつなげるスキルが高いのだろうという気がしています。それは、その前の段階でのコミュニケーション、心を開いてもらうまでの道のりをすごく大切にしているから。その点が他との違いだと思います。困っている人が寄って来て処置する支援が多いなか、Colaboは、困ってるのか困ってないかわかんないんだけど、その困りを解き明かすということを丁寧にやるので、日本になかなかソーシャルワークのスキルがなく、定着しませんが、Colaboがやっていることは、まさにあるべきソーシャルワークの形だと思っています。仁藤さんが素晴らしい現場のスキルを持っているんですけど、これから他の人たちを育成して、他の団体を巻き込んでやっていくことが大事だと思います。これからに期待しています。

日工組社会安全研究財団

Colaboの活動は、犯罪に巻き込まれる危険性が高い少女や女性に寄り添い、手を差し伸べ、安心・安全な社会の実現につながるものです。Colaboの運営するシェルターは、困難な状況から立ち直ろうとする少女や若い女性にとって必要不可欠ですが、この種の問題は短期間に解決できるものではなく、

入居する女性が自立し、次の段階に進むためには、様々な継続的な支援が求められます。当財団は2016年度から支援を継続してまいりましたが、10年に渡る活動を通じて得られた経験をもとに、一人でも多くの困っている少女や女性が困難から抜け出せるよう、活動していかれることを期待しております。

株式会社フラン 代表 奥村聡さん

「下着を通して多くの女性を幸せにしていきたい」という弊社の思いを広げるにあたり、未来のある若い女性たちに対して何かできないかという思いが以前よりありました。そんななか、弊社のスタッフからColaboさんを紹介され、実際の活動を拝見させて頂き、活動内容に感銘し、支援させていただくこととなりました。

弊社は女性下着専門店を営んでおり、従業員をはじめお客様や取引先等のたくさんの女性と関わらせていただく機会があります。そのなかで、周りの生活環境や社会環境が理由で本人の夢や希望を諦めざるを得ない女性が多いと感じておりました。

そういった女性、特に知識や社会経験の少ない若い

未成年の女性に対して、寄り添いながら、一人ひとりを尊重し向き合い、見捨てることなく活動されている仁藤さんとColaboさんに強く感心させられました。このような活動は地道に、継続的に行うことで実を結んでいくのだらうと考えます。未来に幸せを感じる女性が少しでも多い日本になるよう、弊社としても継続的に支援させていただきたいです。

コロナ禍でも変わらず活動されて続けているColaboの皆さんの熱意にいつも感動させられます。また日本全国自由に行き来できる状況になれば、この素晴らしい活動がさらに多くの困っている若者たちに届くことを期待します。引き続き応援させていただきます！

あーちのめし処 野村麻江さん

2020年5月から、バスカフェへお弁当の提供をしています。娘からColaboのバスカフェにお世話になっていることを聞き、3年前から知っていました。当初は、子どもとの住み分けを考えて連絡しませんでした。が、コロナ禍により、利用者が増えてお弁当が必要

になったという投稿を見て、娘とも話をし、私に出来ることがあればと問い合わせたのが関わるきっかけです。お腹いっぱい！野菜たっぷり！できる限り無添加のお弁当を心掛けています。たくさんの女の子たちの笑顔を思い浮かべて作っています。

メディアから見るColabo

朝日新聞編集委員 大久保真紀さん

2014年11月「オピニオン」『JK産業と少女たち』、2019年1月「フロントランナー」等で取材

—Colaboを取材したのは、どうしてですか。

私はもともと、日本人の男性が海外で子どもを買春して逮捕されていた1990年代にアジアで売春宿に売られてた子どもたちや子ども買春の取材をしていました。その後、日本で虐待を受けたり施設で育ったりした子どもたちを取材して記事を書いていました。そのなかで、仁藤さんの講演会に行き、話を聞いて感動しました。自分なりに日本の子どもたちの状況は取材していたけれど、実際に街に出ている女の子たちの話を「私も月25日渋谷にいました」と自分の体験も含めて話されて。現場のこともよく知っているし、今はその子たちに関わる側になっていて、すごいなと。そのときに「福祉が負けていますよ」「おっさんたちは嫌がられても何を言われても、何度でも女の子たちにアプローチしていく」というお話もされました。「性搾取の業者や買春者は、家も用意してくれる。勉強も教えてくれる。困ったらお金を出してくれる、ってなったら、そっちに行きますよ」というのは、まさしく事実に基づいた話で、仁藤さんの見方や発信は新鮮でした。中身があったし、これはただ者ではないと私は思いました。この人は多分、すごい活動をしているのだって思いましたね。意志が強く、自分の経験を話したら批判を受けるかもしれないのに、それを話される。取材していると、自分を飾って話す人も結構いるんです。ある意味、嘘というか、自分をよく見せようみたいな。だけど、仁藤さんは、そういうのは全くなく、話していても明快でした。

今は、あちこち声をあげたり活動したりする人たち

が出てきていますが、あの当時20代で、仁藤さんのような存在はいなかったですね。私は衝撃を受けました。勉強して、調べれば調べるほど、仁藤さんのすごさがわかりました。それで、2014年の11月に大きなインタビュー記事を、朝日新聞のオピニオン面で紙面一ページを使って掲載しました。あんな形で日本の少女たちの虐待や性搾取の話があれだけ大きく出たのは、新聞社では初めてではないかと思います。現状がどうすれば伝わるのだろうか、私も結構悩みました。会社のなかでも、ある意味社会の縮図なので、そこも説得しながらの掲載でしたが、記事の反響はとても大きく、世の中の人にもすごく関心を持って読んでいました。私が知っている世界よりも半歩も一歩も先で仁藤さんはやってらっしゃったので、勉強しつつ現状を知らせていくのが私の仕事だと思って、取材させていただきました。2018年にバスカフェを始め、何回も何回もバスに行き、その上で、フロントランナーというさらに大きい記事を書きました。

—Colaboを取材し、関わり続けているのはなぜですか。

それはやっぱり、進化しているからでしょう。Colaboは同じところにはいないで、どんどんいろんなことを始められている。私もアップデートして行って、女の子たちのこともColaboの活動も知りたい。彼女たちの窮状や制度の不足を書く上で、なるべく彼女たちのことを理解したい。慌てて何か書くより、活動をきちんと見て知った上でじゃないと、この政策がおか

しいとか、もっとこういうふうにしてもいいのではないかと書いていくのに、机上の空論になってしまい、それでは説得力がありません。それまで私が取材してきた施設で出会った子どもたちは、保護されて家から脱出できた子どもたちなので、保護されないまま心身ともに大変な状況にある女の子たち、家にいたらまずいんじゃないのっていう女の子たちがこんなに多いんだなとColaboに来て思います。

—Colaboを取材しての印象や、他の大人や団体と違うところはありますか。

それはやっぱり、目線が全然違います。子どもたちと同じ目線っていうのかな。Colaboは「支援」という言葉を使わないことにも表れていると思います。例えば児相は、もちろんなかにはいい人もいますが、どうしても上から目線ですよ。『私達が決める』っていう。行政だから仕方がないって言えば仕方がないのだけれど、それでも子どもの意見を聞かなさすぎだと思います。そこを法律的にも制度的にも変えるべきだと私は言っていますが、Colaboは女の子たちに選択肢を提示して、情報を与えて、彼女たちが選んでいく。そこが一番違うところだと思います。彼女たちの人生は、彼女たちが選んで歩いていくんだっていう視点。本当に素晴らしい。それはなかなかできることじゃないと思います。

「それだと失敗するんじゃない？」と思いつつも、それでも情報を提供して本人が選ぶ。つまり、それは彼女たちが尊重されるということです。それってすごく大変なことだけれど、彼女たちの人生を考えれば、たとえ失敗したとしても「自分で選ぶ」ことは大事だと思います。Colaboは本当に手間のかかる方法で、彼女たちと共に歩いているなと感じます。普通の大人は「こうした方がいい」とすぐ思ってしまうんですよ。その子がどうしたいのかを大切にしていって、そこがColaboの貴重な姿勢であり、皆さんの活動の根本で、それは他と異なるところだと思います。

Colaboの活動も広い意味では、つまり社会的な言葉で言うと、「支援」かもしれないけれど、でも仁藤さんは「支援」という気持ちでやっていないですよ

ね。支援と言ってしまうと、どうしても「上から下」になってしまいます。女の子たちが生きづらさとか、大変な環境から少しずつ前を向いて歩いていくためにお手伝いしているわけだから広い意味では支援なんだけれど、でも「支援」という言葉では正確には表現できていないように思います。伴走とか、共に生きるとか、でしょうか。なんて言ったら適切なのかしら。みんなの幸せと一緒に探しているっていうのかな、幸せと一緒に開拓しているっていう感じでしょうかね。

普通の相談機関に行ったら上から目線で言われるのと、Colaboのスタッフに接してもらったのだったら、全然違うと思います。「助けてあげる」とか「私は支援するんだ」じゃなくて、彼女たちと一緒に、何とか幸せを見つけていく、それが自分の幸せでもあるんだって仁藤さんたちは思っているんですよ。福祉の勉強をしてきたというような頭でっかちじゃなくて、Colaboのみなさんが自然に醸し出している雰囲気があるし、みなさんが持っている感性のような気がします。

—Colaboの活動の意義と、そこから見えてくる日本社会の課題はありますか。

社会のなかで最も弱い、自分では助けを求められない、そして世の中の人からも無視されているというか捨てられている、「勝手にやってるんだろう」みたいな感じで見られている女の子たちがいて、その人たちに焦点を当てて、光を当てて、彼女たちの人生や幸せを築いていこうという活動なので、ものすごく意味があると思います。これまで誰も手を差し伸べてこなかった女の子たちに手を差し伸べているわけです。しかも、誤解を恐れずに言うと、最初は大人への不信任で「あー？」とか言ってくるような女の子たちも少なくないですから、一見面倒くさい子たちでもあると思います。

でも、そういう女の子たちにしっかり向き合っていく。それは「支援」じゃないからできると思います。彼女たちと同じテーブルにいて、同じ部屋にいるから。きついこと言っても、女の子が泣くこともあると聞きますが、わかりあえているから大丈夫なんだと思います。言われた側が、仁藤さんから言われるのと、そうじゃ

ない非当事者の人から言われるのでは、同じことを言われても受け止め方が違うんだと思うんですね。仁藤さんという人が、歩んできた人生を含めて持っているもの、それが彼女たちに意味があるのだと思います。

また、Colaboには当事者と非当事者、両方いるのがいいと思います。太田さんみたいな変わった感じのおばさんもいるし、森川さんもいる。当事者性、当事者の持つ力や言葉にはすごく力があると思いますが、でも、そうじゃない大人も周りにいる。それを女の子たちはColaboで見ている。彼女たちが生きていくためには当事者のなかだけではなく、社会に出たときにそうでない人たちのことも知らないと言えないですね。だからColaboでは、本当に傷ついている女の子たちは仁藤さんのところで共に、たまには怒られたりもしながら、言いたいことを言いつつ、少しずつ外に開かれていくという印象を持っています。

女の子たちは、すごくよく見ていると思いますよ。仁藤さんの人の使い方とか。仁藤さんってものすごくうまく人と付き合える人ですね。言葉が悪いですけど、うまく人を使える。でも本当に全然嫌味がない。明らかに自分のために人を使っている人もいますが、そうじゃない。社会的なことがよくわかっているなと感じます。身につけているというか、培ってきたんだと思うけれど、この人はこの程度のつきあいにしておこうとか、その距離感がよくわかっていると思います。それって「こういうふうにしなさい」と人に教えられるものではありません。でも、近くにいる女の子たちはそれも見ていると思うんです。「こういうときはこう付き合うのか」とか「夢乃さん、うまくやってるな」とか。意見の違いはあったとしても付き合うんだなというの、女の子たちは、仁藤さんをモデルとして見ていると思います。それも元当事者だからこそだと思います。そこはColaboの強みだし、意義だし、Colaboは女の子たちにとって本当に重要な場所だと思います。

Colaboは、子どもアドボカシーの最前線を、いち早く歩いていると思います。「Colabo」の名前にしても、シェルターにしても、彼女たちの意見を聞いて決

めていますよね。女の子たちと一緒に歩いている。子どもの意見を聴くというと、「子どものために」って思いがちですが、違います。本当は「子どもと一緒に」なんです。「女の子たちのために」じゃなくて、「女の子たちと一緒に」彼女たちが何をしたいのか、どうしたいのか、ただ話を聞くだけでいいのか、何かを訴えたいのか、変えたいのかってところから彼女たちの希望を聞いて、それを実現するためにはどうすればいいだろう、どういう方法があるだろうということと一緒に考えてやってみる。それが結果的にうまくいかなかったとしても、尊重された女の子たちはそれで納得して、また次に成長していくというのがColaboの活動で、まさしく、それは子どもアドボカシーなんです。アドボカシーということが大切だと日本ではあまり言われていないときから、Colaboはやっていると思います。

—仁藤：「私たちは『買われた』展」や講演で女の子たち自身が経験を話したりするのは、その子がただ話したいから話しているのではなく、この現状を変えるために、むしろ大人たちのために話してあげてんじゃないですか。でも、それも「支援」の人が見たら「それが女の子たちのエンパワメントになるんだね」と支援の手法として評価的な見方をする。確かにそういう側面もありますが、社会や大人を変えるための主体として活動しているのにはと思います。

「支援」「支援者」としての視点のみで見ているんですね。Colaboは相手がそういう人であっても権力者であっても、どこに対しても「顔色を見ない」ということも感じています。それも女の子たちに伝わっていますよね。最近では、いろんな立場の大人たちがColaboの活動を無視できなくなっていると思います。社会的な意義がすごくあって、他に代わる活動がないので。それはColaboの力だし、仁藤さんの発信力だし、女の子たちの力だと思います。これからますます楽しみです。

専修大学教員、元共同通信記者 澤 康臣さん

2014年9月、JKビジネスについて「裏は性産業」「背景に虐待や貧困」など実態を報道

—Colabo取材したのは、どうしてですか。

2014年5月にニューヨークから戻ってきて、それまで経験のなかった調査報道、深掘りニュースを担当することになりました。秋葉原に買い物に行ったとき、制服姿の若い女性たちが、男性たちに声をかけていて、少女たちと男性たちがペアで街を歩いているのをたくさん見て「こんなだったっけ?」と思ったんですね。これは社会問題だと思い、報道していきたいと思いましたが、自分が女性たちに声をかけても、お客さんとして扱われたり、本当のことと言わないのではないかと。ちゃんと事情をわかってる現場を知っている方に話を聞くことから始めるのがいいだろうと調べたら、仁藤さんが大変奮闘されてることがわかりました。連絡をしたらすぐ、一生懸命に返信をくださって、お会いすることになり、JKビジネスの実態を記事にしました。

—その後もColaboに関わり続けているのはなぜですか？

記者は人間関係を大切にします。例えば、事件被害者への取材でも、長く付き合う人は多いんです。そういう関係性がないと継続的な報道はできません。Colaboに行く伝えるべきことが見つかるんじゃないかという気持ちもありましたし、「これは、ほっとけない」っていう。もちろん記者なので、当事者として関わりを持つことはできるだけ控えざるを得ません。私は、支援者ではなく、観察者ですというラインは守るようにしていますが、ちょこっとお手伝いすることもありました。

—仁藤：2015年にシェルターを初めて作ったときには、物件の掃除を女の子たちと一緒にしていただいて、澤さんは背が高いから、上のほうのクモの巣を取っていただいたり、「私たちは『買われた』展」の初開催の日も、開場直前になっても準備が間に合わなくて「や

ばい!手伝って!」と、これは他のメディア関係者の方も総出で、パネルの準備や照明の設置など、なんでもやっていただきました。(笑) 澤さんは、そこで女の子たちとも関係性をつくって、記事にすべきことを見つけて、児相の一時保護所の問題も記事にしてくれました。関係性があるから、女の子たちも話せるんですね。

みなさんにはお話ししてくださって、頭が上がらないですね。そういう勇気のある若い市民に支えられている。スピークアウトする人がいることで社会は変革されると私は思っているので、記者に向かって、話してもいいよと言ってくれる方々に、本当に敬意を持ちます。

今は大学で教える立場として、ジャーナリズム倫理を考えると、本当は関わり過ぎるのは微妙で、記者は誰からも独立してないといけません。とは言いつつも、やっぱりほっとけないものはあります。本当に、吹けば飛ぶような人数で運営されていて、大丈夫かいなということもあるし。こういう人たちが、社会を変えるだろうとも思いますし、取材が終わったから「じゃあね」っていうのは浅ましいっていうか。

—Colaboの取材を通して、ご自身の認識が変わったことはありますか？

もちろん変わりました。学ぶことの多い取材だったことは間違いありません。仁藤さんやColaboとつながるみなさんの話を聞くと、例えば児相や警察や行政は、こういうふうに見えるのかなど、気づきの連続です。私が見てきたものとは全く違う、目から鱗という日々で、自身も成長させてもらったと思います。

私はそんなに勇気のある人間じゃないので、ヤクザとか怖いわけですよ。性産業や男たちのところに入っていくことなど、自分にはできてないことやコンプレックスもいっぱいあるんですね。そこに声をあげて活動し続けているみなさんには本当に敬意を持っています。

—Colaboを取材しての印象や、他の大人や団体と違うところはありますか。

Colaboは当事者の相互扶助の活動であることをすごく感じるんですね。年が近いってこともあるんでしょうけれども、仁藤さんが当事者のちょっとお姉さんみたいな立ち位置でおられるから彼女たちも心を開く、開く角度が相当大きいのではないかと感じています。パターナリズムや利用主義的であったり、ご立派な団体が少女たちを善導する、そういう団体とは異なりますね。Colaboにつながった女性たちと一緒に悩む感じがすごくあり、そこにColaboの意味や独自性があると思います。

—Colaboの活動の意義とそこから見えてくる日本社会の課題は？

課題だらけですね。今、大学生とも付き合っていると、若い人が声を上げる回路がなさすぎると思います。きつと言いたいことはあるのに、それにも気付いていない。痛覚って大事で、肉体の場合、体に悪いところがあると痛いから気が付きますが、言いたいことがあったり、お腹がすいていても、飢餓感を感じられない状態になっている若い層がたくさんいる。

先日、学生と、アメリカの高校で銃の乱射事件をきっかけに、高校生が銃規制を求める運動を起こした映像を観ました。学生たちと同じ世代の若者たちの話です

が、多くの学生は、こういうことがあること自体にびっくりする。声を上げて、社会が変わっていくんだって。理不尽を自分のせいになしたり、自分を責めていて、自分のなかにある意見に気づく場面があまりにも奪われていると私は思うんですね。そして、声を出す場もない。

Colaboでは、単に「助ける」とかでなく、社会に参加することを一緒にして、もちろん意見を出していいし、それが推奨される場だと感じています。社会には、施しを受けている人として上から目線で見ようとする人が多く、「大変な目に遭っている人を助けよう」というだけならあたたかく見ようとしても、意見を言い始めると叩く人がものすごくいて、「これは恩恵ではなく、権利なんです。権利を実現するだけです」と言い出すと攻撃する。そういう状況もColaboの活動を通して可視化されてきたと思います。そこに乗り越えないといけない壁があると思います。

—これからのColaboに期待することはありますか。

Colaboはすごくユニークな、燦然と輝くところだと思います。活動があちこちに広がっていくといいなと思います。Colaboとまったく同じである必要は全くないと思いますが、声を出せる、エンパワーメントとエンカレッジメントになる、そういうグループがいっぱいできればいいなと思っています。

NHKチーフ・ディレクター 浅田 環さん

2014年9月「ハートネットTV」

2016年10月「ETV特集」『私たちは買われた—少女たちの企画展』で取材

—Colaboを取材したのは、どうしてですか。

私がColaboの取材を始めたのは2014年、当時社会のなかで話題になっていた子どもの貧困を取材するなかで、子どもの生きづらさって金銭的な貧困だけではないと思い、子どもの支援をしている団体をさま

ざま調べていました。児童養護施設や里親などの他に、子ども食堂など色々なカタチの子どもの支援が増えてきた時期でしたが、仁藤さんの活動を新聞記事で見て、それまであまり見られてこなかった、当時の”THE・困ってます“というカテゴリーに当てはま

らない子どもたちに関わっている活動だと思い、話を聞きに行きました。

当時、JKビジネスなどの問題があるとわかっている、テレビではまだこういう女の子たちの状況を本格的に取材できておらず、映像メディアとして取材をしたいがどうしたらいいのか…、難しいと思っていた時に相談できたのがColaboの仁藤さんでした。

—その後も、関わり続けている理由はなんで すか？

福祉関連の番組を作るなかで、いろんな支援団体の取材をさせていただくと、掲げていることややりたいことに賛同できるところがほとんどなんです。一方で、その人たちがどういうベース（基礎）を持ってどういう信念でやっているのか、この後どういう風に持続させていくのかとか、そういうところが見えないと、責任を持って取材できないという想いが自分のなかにあって…。最初に「ハートネットTV」という福祉番組でColaboの取材をさせてもらった時は、どちらかというと、Colabo全体というよりも、Colaboを立ち上げた仁藤さんという人のフューチャードキュメンタリーで、そこで仁藤さんの活動の原点をしっかりと取材させてもらったのが大きかったんだと思います。Colaboという名前に象徴されていますが、支援を「される側」「する側」ってことじゃなくて、「一緒に関わって、一緒にやっていきましょうよ」というスタンスが信頼できたこともあって、取材で関わっていきなと思いました。

支援や福祉の団体だけではないと思いますが、何かを提供する側、される側ってなると、どこかで提供する側の勝手な理由で支援やサービスを狭めていってしまうことがあったり、自己満足的な形になる可能性もあると思っています。もちろん支援する側のやりがいとか、これをやるべきだという思いがないと続かないと思いますが、それが先に立ちがちな“仕事”や“なりわい”が福祉業界にも増えてきているのではないかと…。Colaboの活動では、そうじゃないところを大切にしようって、すごく強く決めている感じがありました。

例えば、女の子たちと、もっとハレーションを起こさずに関わろうと思ったら関われるはずですが、結構けんかしてるし、お互いの気持ちに揺れがあったり、ちゃんと”感じて”関わっているというか。そういう”仕事じゃない感”って、これからも変わらないんだろうなって。女の子たちに関わっていて、凹むことも結構あると思うんですが、逆に”ここまで”と決めちゃえば、そんなにダメージを受けることもないだろうに、その衝突というか、分かり合うことを諦めていない感じが、女の子たちとのやりとりでもすごくありますよね。行政とのやりとりでも、たびたび児童相談所の対応に腹を立てたりとか、そういうことがあっても丸く収めようとしなくていい感じが、ただの”仕事”と考えて割り切っているとできないことだなと思っています。

また、Colaboのスタッフ自身が、いびつなところとか、弱いところとか、ちゃんと自分の間違いを認めたりとか、そういう大人たちだからこそ、女の子たちもそのまま受け入れてもらえるって思える。その”いびつ感”がいいというか。”ちゃんとした大人”ばっかりだと落ち着かないけども、”割とこの人隙あるな”とか、そういうところがないと女の子たちも大変だなと思うんです。Colaboはそこらへんがすごくあるので、”ザ・仕事”って感じとは程遠いと思います。スタッフの太田さんが太田さんのまんまでい続けられるColaboってすごいと思います。(笑)

—仁藤：「私たちは『買われた』展」をETV特集で取材した時に、ある女の子が言っていたのは、「Colaboに来るまで、大人はこういうもんだと思ってたけど、いろんな大人がいるんだってというのがわかった」と。その一つに太田さんの存在や、当時共同通信の記者だった澤さんが手作りのプリンをもってよくColaboに来ていてパティシエだと思っていたとか、浅田さんみたいにインタビューで自分の話がやたら長い人がいたりとか、いろんな大人がいるんだってということが知れた…と話をしている。そういう場になっているのは、支援する側される側だけじゃない関わりの場だからだなと思いました。

私も取材する立場とすると、「この人にどういう意

図で何を聞くんですか」とカチッとしている支援者の方たちもいるんですが、女の子たちにはカチッとし過ぎる環境では関係性も作れないし、本当の話が聞けないと思う場合もあります。でも、Colaboは割と自由にそこにいさせてくれる。ただ、自由にいさせてもらっているからこそ、より責任感を持ってキチンとやらなければと思えるし、正しい緊張関係で取材できているような気がします。

—仁藤：Colaboのことを、中に入り込んで取材されているのは、今回インタビューさせてもらったメディアの3人です。浅田さんたちだから、女の子たちとの場にも来てもらって、自由に話をしてもらったりしていますが、浅田さんが女の子たちに自分の話をするっていうところ、私たちと似てると思いました。その「仕事じゃない感」。「こういう場面を切り取りたいから、こういうの撮りたくて、パッと来てパッと帰る」みたいな取材のほうが多いんですね。そういう人は女の子たちには会わせられない。浅田さんは、女の子たちにも浅田さんとして認識されてるし、浅田さんの人となりや、取材の意義や想いも理解して、女の子たちも自分の話をするみたいな。

Colaboは、仕事じゃない感で訪ねても、怒られない空気感がすごいですよね。「仕事」になると時間が区切られていたり、一見寄り道をしていそうな質問をすると「意図は？」みたいな感じになって、なかなかやりとりができなかったりすることがあるんですけど、女の子たちの本当の声を聞きたいと思ったときに、そういう関係づくりも含めて、聞ける状況があります。Colaboにはすごく難しい事情を抱えていたり、自分の経験を言いたくない子もいると思うんですけど、話してもいいなと思ったときに、ちゃんと伝えてくれる子たちがいて、それはColabo自体が緩やかさを担保しつつ女の子たちに関わっているからだろうなと。

最終的には、私は伝えることが仕事なので、伝えるべき声が聞ける場所なのかどうかがとても重要で、Colaboに行くとその時々で、聞けべき声に出会えるのが、関わり続けている理由として一番大きいです。

—仁藤：浅田さんが遠回りっぽい質問をするのも、どうしたらこの子たちの声、現状、姿を伝えられるんだろうって、その子たちの話を聞きながら、一緒に悩みながら形にしているからですね。そういう姿勢があるから、女の子たちも話すのかなって。こうだよって切り取りたい、撮りたい画を撮りに来る大人とは違うから。

Colaboに来たときに、そうしないと聞けないな、手ごわいなってというのはありました。女の子たちもみんな、人を見る目があって。それは人との関係で悩んで考え続けてきた子が多いからだと思うんですけど、逆に自分が鍛えられたというか、ちゃんと向き合えないとすぐバレルし、そういう大人にはなりたくないし。それがまたその子たちの傷になったりすることもやめたいと思ったので。

「『買われた』展」の取材では、女の子たちの経験は私自身が直接的に経験したことではなく、本当は間接的にはあったりすることだったと思いますが、そうした中で、女の子たちのトラウマや被害に触れることについて怖いなと思いつつ、ちゃんとそれが怖いことだと認識しながら取材しないといけないと思っていました。何が撮りたいんですか、どう描くつもりですかと短期的に突きつけられていたら、できなかったと思います。仁藤さんが「『買われた』展」の企画段階から声をかけてくれたので、私は番組の提案も通ってないときから、ひたすら女の子たちの話を聞きに通っていましたが、話してはくれるけど、これをどう伝えるべきなのか、悩むことも多かったです。悩んだときに、こういうことで悩んでるっていうのを確認しあえる、Colaboの仁藤さんや稲葉さんがいて、確認しながら進められたから、取材ができたとも思っています。

—Colaboの活動の意義と、そこから見えてくる日本社会への課題はどう考えていますか。

Colaboでしか聞けない声があると思いますし、形を変えているいろんなことをやっていますよね。活動を始めたときは、本当にアウトリーチを一生懸命やっていて、その後シェルターを作って、シェアハウスを作って、

「『買われた』展」もやっていく。そして今はバスもやっている。目的は一緒なんだけど、やり方をすごくその時代に合わせて、自分たちができることや規模感などをブラッシュアップしてやっている。そういうことがフレキシブルにできているのも、大きな意義があるのかなと思います。

それは多分、Colaboっていう名前に象徴されるように、自分たちだけじゃなくって、女の子たちや、性被害や性搾取、性暴力の問題に関心がある人たちに対しても、考え方ややり方の違いはあっても刺激があって、ときに一緒にコラボして。大切にしていることや思いの輪が広がっていくような活動をしていくことがColaboの意義なのかなと思います。

社会の課題ということでは、Colaboの活動を通して関心がある人が増えて来ても、今の社会は大前提として、大人の男性中心的な考え方でつくってしまっているから、まだまだこの現状を「おかしいんじゃない?」と言える人が、日本社会には少ないと思います。今、コロナ禍で、みんな大変、みんなが我慢しているという状況のなかで、みんなと違う声が上げづらくもなっている。大多数の意見じゃないことを聞けない社会にならないように、時に煙たがられながらも声を上げ続けるというのも、Colaboの意義だと思います。

「『買われた』展」の取材で一番大きく感じたのは、ある女の子が「買う男性が悪いんだけど、結局声をかけてくれたのは男性しかなくて、そういうときに女性が声をかけてくれたら、私はあそこに行かなかったかもしれない」と話している。それが全てにつながるなと思っています。私も女の子に街中で声をかけたことはなかったですし、社会全体の問題だし自分の問題でもあることに気づかせてくれました。それは

「『買われた』展」の番組をやる上でも大切でしたし、今の自分の仕事でも「これおかしいな」とか「大丈夫かな」と思ったことに「でもそんなに大きな問題になってないから、まだいいか」とスルーしちゃだめなんだなと思わせてくれていて、そういう言葉を「『買われた』展」の取材のときに、女の子たちから色々投げかけてもらえて、それがすごく私のなかでも大きな

ことになっています。

なので、メディアにとってのColaboの意義と言うことで考えると、やはり新しい気づきと覚悟をくれるということだと思います。テレビの制作者たちも、そういう女の子たちの状況を知って「大変だ」とは理解するんですが、じゃあ何を考えていかなきゃいけないのかという時に「彼女たちがそこに行かないために」「そういう選択を彼女たちがしないために」と考えることがこれまで多かったと思うんです。そういうことでなく、彼女たちの背景をまず知ろうよ声を聞こうよということはどう番組にしていけるかを考えるのは結構難しかったです。児童買春という重く大切なテーマなので特にかもしれません。

テレビって「課題・解決」で作りがちで、どう解決できるのかが分からないと、まだ社会に提示すべきじゃないんじゃないか…みたいなところもあるんです。「その子たちの声を聞くことで、問題が解決できるのか」と聞かれたこともありました。解決策がぼんって提示できないから番組にならないじゃなくて、その溝を埋めていく役割がこの番組にあることを理解してもらえないと想着て番組を作りました。

そして、観た人が「これは問題だと思いました」「これって考えていかなきゃいけないよね」と自分で納得し、「知れてよかった感」で終わるような番組にはしたくないとも思っていました。今も解決されずに続いている問題ですし、彼女たちは今ひとときColaboに出会って、仲間と思える子たちがいたりして、その瞬間は苦しかったときから抜けているかもしれないけれども、そうじゃないときもあるし、彼女たちだけでなく、他の子たちがそうなるかもしれないし…。そういうことを読後感として感じてもらいたいなと、見た人に悦に入られては困ると意識して作りました。

—仁藤：「『買われた』展」の感想で「どうしたらいいのかについての展示が欲しかった」と書く人がいると、女の子たちと「それはお前が考える」と言っていました。来場者アンケートの内容も女の子たちが考えて「この現状を変えるために、あなたには何ができますか?」という質問もしています。

あの企画展は、展示を観た後で、みんながすごく一生懸命感想を書いていたのも印象的でした。アンケートって適当に何が良かったですとか、頑張って下さいとか、一言二言書いて終わるようなことが多いと思いますが、「『買われた』展」は、女の子たちのあれだけの言葉や写真に対峙したら、ちゃんとしなないといけないと思うんだと思います。感想に書かれた文章の量も想いも、”圧”がすごくて。多分、あの展示に来た人たちは、帰ってからその夜も、ずんって考えてる人が多いじゃないですか。それは自分が経験した、しないに関わらず。マニュアル本みたいな「こうやればあなたも明日から大丈夫」みたいなことでは済まされないから。

—Colaboと女の子たちとの関係については、どう感じていますか？

支援の現場では、AさんとBさんがいて、お互い不安定な様子があるから二人は接触させないとか分けるということがあると思いますが、Colaboではその関わりも含めて受け止めようとしていると思います。支援の現場では、”めんどくさい関係性”になるかもしれない子たちに関わらせないほうがいいと考えるところが多いと思うんですよ。それって大人が考える、子どもが安心安全に過ごせるようにという支援にうまく乗れるようにしてあげるということですよ。でも、社会に出たらいろんな人がいて、めんどくさい関わりとかもあるから。Colaboではそういうこともありつつ、それごとまるっと支えていくというか、一緒にやっていくスタンスがあるのが特徴的だと思います。

福祉や支援の現場では、受け入れてから分ける場合もあるし、「うちの支援している子たちとも合わない」ということで、うちでは受けられないと線引きをしているところもあって、どうしてこの場には同じような子しかいないんだろうと思ったら、自分たちが支援できる子を選んでるっていうか。支援の仕方はそれぞれですし、もちろんマンパワー的にどうしようもないこともあるんです。でも、Colaboではそういうことをせずに、果敢にとりあえず1回ごちゃっとしてみて、で、そこから、色々なことが起きて出ていっちゃっても、

また帰って来てっていう。みんな出戻りますよね、出戻りができるのもいいなって思います。

戻ってきたときに、相変わらず仁藤さんが、高めの声で”落ち着いた大人”になってない感じがいいのかもしれない。出戻ったときにあまりにちゃんとした感じになってたら、「私がいた頃と違うわ」って思っ入りづらいかもしれないけど、他のスタッフも、みんな前とあまり変わらない感じで存在しているところも大きいんじゃないかなと思います。

—仁藤：そもそもColaboと繋がって、シェアハウスで暮らしているメンバーは、他ではじかれてきた人たちの集まりだから。その子たち自身もいびつだけどそのまま、ごちゃごちゃやってるっていう感じですよ。スタッフもそんな人が多いかもしれないし。(笑)

Colaboでは、女の子たちがわかりやすく成長して、「〇〇さんの350日の記録です」みたいな番組には絶対ならないというか…。わかりやすいステップアップがないようで、でも、新しいこともなんかあるみたいな。学校に行ったり仕事始めたりもする。でも、辞めるしみたい。それって「うまく支援できてないんじゃないの？」という人もいると思うし、「こうあるべき論」が支援のなかにも強いのかも。

支援も「見える化」しなきゃいけない、補助金のための報告に時間を取られたり、行政とうまくやることも大切になってきて、報告しやすい、わかりやすい効果を求められることが、支援している人たちを辛くさせている場合もあるんじゃないかとも思います。

Colaboは、取り組みの必要性を訴えて行政の補助金を受けるようになって、必要であれば、今まで通り、行政に対しても批判や意見をしている。そういうところも特徴的で、大変だと思いますが、女の子にとっても社会にとっても、とても大切な存在になっていると思っています。

理事によるショート対談

川村百合弁護士 と考える 児童福祉とColabo、子どもの権利保障

—Colaboと繋がったきっかけは？

私は弁護士として長年、子どもの権利擁護活動に力を入れてきました。2004年に、日本で初めての子どものための民間シェルター「カリヨン子どもの家」の開設に携わり、シェルター運営主体であるNPO法人（後に社会福祉法人）カリヨン子どもセンターの理事を2017年まで務めました。

2015年に東京都の青少年問題協議会に仁藤さんも私も委員として参加し、その会議で出会いました。その後、Colaboで虐待から逃れてきた中学生を保護することになって、そのときはまだ仁藤さんも児童相談所とのやりとりの経験がなく、力になってほしいと連絡をもらいました。シェルターができる前で、仁藤さんがお家に泊めていて、児童相談所が保護すべき子だったのですが、学校が児童相談所に相談しても動いてくれなくて困っていて、また本人も絶対に一時保護所には行きたくないと保護を拒んでいました。そこで、本人には、一時保護所ではないところで保護してもらえるように、私が「あなたの弁護士」として交渉すると言って、学校とも協議したうえで私から児童相談所に虐待通告をし、ケース会議開催の提案をして、児相と学校、コラボを含めてケース会議をして、里親さんのところで保護してもらえるように交渉しました。

カリヨン子どもセンターを始めたとき、NPO法人のシェルターに一時保護委託してもらえるようになったのも、前例を突破してできたことでしたが、当時のColaboは児相から見るとまだ海の物とも山のものともわからないところで、そういう民間団体や里親さんへの一時保護委託ですら、あまり前例がなかった時期でした。

それでもなんとか里親さんのところに一時保護委託させることができましたが、一時保護中の子どもたちが学校に通うことは想定されておらず、通学のための交通費は出ないと言われて、Colaboに出してもらいました。最近では、一時保護所からも通学させる児相も出てきましたよね。

次に関わった女の子は、18歳以上だったので、福祉事務所に一緒に行きました。そのとき、仁藤さんも生活保護の申請同行自体が初めてでした。最近、現在地保護を拒否しない福祉事務所が増えましたが、そのときは「住民票がここにはないから保護できない」と言われました。「法律上は現在地保護ができるはずですよ」と言うと、「うちは現在地保護はやりません」と言ったものの、一度引っ込んで、上司と相談した後、「やります」となりました。

仁藤さんのすごいところは、私がやったことをすぐに真似て、最初から知っていたかのように、現在地保護なんて当たり前でしょという顔をして、役所や児童相談所とやり取りしていると思うんです。(笑) 弁護士でも、子どもの事件をやる人は少ないし、福祉事務所とのやりとりの経験もない人が多いので、福祉に関する法律は知らない人が多いのですが、仁藤さんは弁護士以上に弁護士らしく、福祉事務所や児相との交渉もできて、制度のこともよく知っていて、若い弁護士にアドバイスできるくらいになっています。私がやって見せたことはすぐに吸収して実践するので、すぐに、私が一緒に行く必要がなくなっちゃって。(笑) 最近私がやることは、親対応や、警察に捜索願が出ている場合に子どもの代理人として連絡をしたり、いったん保護させた後に、ケース会議を開くように要請して、ケース会議に参加して行政

を動かしていったりすることなど、より「弁護士らしい」仕事にシフトすることができるようになりました。

—仁藤：Colaboの持っている選択肢では良い方法が見つからず、行政を動かしたいけど、自分たちだけでは難しいときに、川村先生に本人の代理として入ってもらっています。川村先生に入っていたことで、Colaboがシェアハウスとして運営する中長期シェルターでも児相からの一時保護委託を受けられるようになり、保護観察所が「制限住居」としても認めました。最近では、児相が行き先が見つからない子を押付けようとしてくることもあります。私たちは公的機関に繋がれないでいる子たちに向けて活動しているので、児相の受け皿になるのはおかしいと考えています。

一時保護委託や、保護所からの通学など、Colaboの活動を通して前例を作ったことが他にも広がっていています。若年女性支援を始めた他の団体でも、Colaboでの経験があるから、「他の児相ではやっていきます」と言うことで、道が開ける。里親への一時保護委託も、けっこう出てきていると思います。

—弁護士の役割はどのようなものですか。

私はColaboの理事ですが、子どもに関わる時は、あくまで「子どもの代理人」という立場で関わっています。本人に、「あなたの弁護士」だということを必ず言います。

Colaboにつながって、私のところに「なんとかして」と言ってくる子は、家に帰れない、家に帰りたくない状況でつながってきているので、今夜の居場所、またこれからの居場所として、まず物理的な居場所を確保することが不可欠です。そうじゃないと街の中を放浪して体を売るしかないとか、性被害に遭ってしまうような状況なので、まずは居場所を確保するために18歳未満で児童相談所の年齢であれば児童相談所、それを超えている場合には女性相談センターに対して、本人が家に帰りたくないと言っている、でも、例えば学校に行きたいと言っている、あるいは学校は行きたくなくて働きたいと言っている、そのため、家に帰らない前提でも学校に行きたいなら行けるように、それが両立できるような居場所を見つけてくださいと伝えます。それが本人の意思でもあり、この年齢では基本的には本人

の意思に従ってやるのが最善の利益であるので、それに適うようなことをやるのが、行政としての責任でしょと言い、動こうとしない行政をなんとか動かそうとしています。

児童相談所にしろ女性相談センターにしろ、前例がないことには腰が重いので、私が弁護士である強みとしては、「前例がないからできない」と言われても、「法律上はできないことはないし、法律上はむしろやらなきゃいけないでしょう」と話して、「違法にならないことのできることは全てやってください」と言うことで、「前例がないけどやります」ということが少しずつ広がっていくことだと思います。

—Colaboの活動の意義はどう捉えていますか。

子どもが保護を受ける権利を、誰が保障するかというと、本当は国や自治体など、公的な責任において果たさなければならないことです。それが万全であったら、Colaboは必要ないかもしれませんが、現実には公的な保護が受けられていない子がいっぱいいて、路上で生活し、体を売っている。それには理由があって、なかには一度ならず二度三度も児童相談所に保護された経験がある子もいて、でもその度に家に戻されて、公的機関が関わっていたのにきちんと保護されていない。子どもの側からすると、自分のニーズに合っていなかったとか、酷い仕打ちをされたとか、かつての保護歴の中で、保護を受け容れることができない理由がいろいろあって、そういう子たちが自らいわゆる「支援」を求めることはしなくなっている。Colaboだからこそ、そういう子たちにアプローチして、彼女たちもアクセスしてくる。その子たちは別に支援を受けるつもりで来るわけじゃないけれど、接する中で結果的に、その子自身の生きる権利とか、成長発達する権利を保障することになっていく。中にはその先、公的な保護に繋がなければいけない子が多いけれども、そういう隙間の接着剤みたいなことをしてくれている意義が大きいと思っています。

最近では「アウトリーチ」が必要と言われるようになりましたが、アウトリーチのやり方も、前例もなく、みんなが思いつかないような方法でやるのがColaboの、仁藤さんの発想の豊かなところですよ。

それから、相談窓口をつくって待っているのではなく、

女の子たちのツイッターなどをフォローして、この子は今危ない状況にあるなっていう子を見つけて、繋がっていく。そういうアウトリーチの仕方をしていることもすごいと思います。今、「LINE相談」は他でもやるようになってきたけど、それは自分から相談してくる子たちに対応しているわけですね。こちらから、SNSをチェックして繋がろうとしたり、そこまでやっている人はいないと思います。

—Colaboが、他の機関や大人と違うと感ずるところはありますか？

やっていること全てが違ふと思います、関係づくりの仕方も、仁藤さんは常に「支援する側／される側じゃない」て言いますよね。私も含めていろんな団体、そういう気持ちは持ってやっているとは思いますが、それを実際に表して、実践できるのが仁藤さんのすごいところで、Colaboではそれをみんなが受け継いでいると思います。仁藤さんの採用基準は厳しいので、それを受け継いでくれる人、共有できる人しかスタッフとして採用されないから。

私も、他の団体でも居場所づくりに関わって、居場所が必要ということを書いてきましたが、仁藤さんに言語化してもらったなと思うのは、「居場所」とは「関係性」だということです。

—今、困っている女の子に伝えたいことと、大人に伝えたいことはありますか。

どんなに困っていたり、苦しかったり、辛かったりしても、みんなに幸せになる権利があつて、生きる権利がある。それが実現できていないとすれば、それはあなたが悪いわけじゃなくて、それを実現できていない社会が、大人が悪いから、自分が幸せになるために、「こうしたい、ああしたい」ということをちゃんと要求して欲しいなと思います。要求していいんだよって。困っている人とか、ひどい目にあっている人に限って、耐えるのが当たり前になっていて、「こんな要求をしたら、わがままなんじゃないか」とか「もっと大変な人がいるから」と、自分は我慢しなきゃいけないと思っている子が多いと思うのです。それはそういう経験をさせられてきたり、そう言われてきたからそうになっていると思ってるんだけど、本当はそうじゃないので、「わがまま」をいっ

ばい言っていいんだよ、甘えていいんだよって思います。

もしそれが今まで受け止められてきていなかったとすれば、それは受け止められていなかったこの社会が悪いので、私も社会の一員として「ごめんなさい」と思っています。だから、今からでもどんどん要求していいし、「わがまま」を言って、それがColaboにつながったことによって果たされるといいなと思います。

そして、大人にも自分が幸せだと思つて生きて欲しい。そうじゃないと、良い支援はできないんですよ。子どもだけでなく、いわゆる社会的弱者の支援や、多様性を保障しようということって、自分が幸せだと思えていなかったり、自分に自信がない人にはできないと思っています。だから、みんなが我慢するのではなくて、みんなが我慢しなくていいような社会にしたいなと思っています。自分と違う人の権利を守りましようと言っても、自分の権利が守られていると思っていない人はそれどころじゃないよってなるから、だから大人が、自分に不全感や満たされていない感があるなら、自分自身も要求を出すことが必要です。自分の人生に満足して、人に対して寛容になる、優しくなる、そういう社会を作りたいなと思っています。

今の社会は、死刑や法律の厳罰化など、人に厳しく厳しくっていう感じになっている。世界もそうかもしれないけれど、日本社会が格差社会で、貧困が増えてきたりコロナがあつて余計にみんなが大変大変ってなっているときには、人に優しくなんかできないですよ。Colaboの活動を広げていこうとしても、社会全体に余裕がないとできない。だから、みんなで頑張つて社会を変えようって言いたいです。

—今後のColaboに期待することを教えてください。

Colaboには、誰もやっていないことを、どんどん新しいアイデアと突破力で、そして仁藤さんの人脈の中で使える力を使って、今まで誰もやってないこと、できなかったことにチャレンジし続けて欲しいです。組織が大きくなって、実績が出てくると保守的になりがちだから、そうならないように、女の子たちの居場所を守りつつも新しいことを常にやっていってほしいです。Colaboが力を持ってきたからこそ、Colaboなら任せてもらえることが出てきたら、それを担えるような法人になってほしいです。

奥田知志さん(牧師、NPO法人抱撲 理事長)と考える Colaboのこれから

—Colaboの理事になったきっかけは？

2014年、仁藤さんが福岡での講演に合わせて抱撲に来て、我が家に泊まってくれたのが出会いでした。我々は2000年あたりから「伴走型支援」が必要だと言っていて、その話をしたときに、仁藤さんが「ヤクザのほうがよっぽど伴走型だ」と話していたのが印象的でした。そこには居場所や食いぶちがあったり、女の子を囲って働かせるにしても、店で一つトラブルが起これば、本人に合わせてすぐ他の店にさっと変えたりする。あのきめの細かさにはたして支援者たちは勝てるだろうかと話していました。

そのあともColaboの活動は社会的に注目されていて、先端的で、今までなかなか誰もできなかったところをやっています。しかも、非常に危険と隣り合わせで、仁藤さん自身もリスクを負いながらやっているのを横で見ながら、みんなで応援しないといけないと思いました。危険から活動を守っていくために大きな話題にしていくことも、応援団も大事。当時、組織としては構築途中で仁藤さんと稲葉さんが自転車操業でやっている感じだったので、理事会をつくることになったとき参加しました。

私がやってきた活動とは組織も地域も歴史も違うので、構築段階はそれぞれになりますが、私たちのような現場優先の組織では、必要な支援をするために現場の活動がどんどん増えていき、手が足りないので一人でも入ってきてくれたら、現場に行きたくらいとなります。抱撲は1988年から活動し、NPO法人になったのが2000年、経理や総務専従のスタッフがおけたのは2004年で、一番最後にできたのが総務部や財務部でした。しかし、こうした活動には攻撃も多く、そういうところで問題が起きたら一発でおしまいだから、足を固めておかねばいけない。ですが、そのための人件費はどこからも出ないんですね。基盤づくりに抱撲の経験を活かしてもらえたらと思いました。

—Colaboの活動意義をどう捉えていますか。

徹底してこちらから出かけて行き、出会っていることに大きな意義があると思います。「出会う」というのは、単に人と人が会うのではなく、例えば相談窓口に来た人と「会いました」ということも日本語としては成立するけれど、「出て行かないで会う」という出会いの方が多いですね。抱撲やColaboが出会ってきた人たちは、日中の時間帯で動いている行政や国がつくる制度の支援の枠に入っていない。Colaboの活動は、基本的には路上で声をかけて、一緒にご飯食べない？と寄り添っていく、まさに伴走型のスタイルを貫いていることは最も大切だと思います。

Colaboのいいところは、いい意味で偏った支援なんですよ。行政と連携したり委託を受けたりするとしがらみも出てきますが、夢乃さんはダメなことは当然「ダメ」ってはっきり言える。NPOのような団体の強みは、行政に言われなくても必要があればやること。路上で聞いてしまったことに答えられないといけない、なかったことにはできないから、出会った責任をとるためにも、言われなくてもやる。それと同時に大事なのは、「言われてもしない」という決断です。Colaboは「お金を出すからやってください」と言われても、困っている人たちのためにならないと思えば断っていますよね。そして、他の人ができることは、しない。

—活動をどう広げるか。今後の活動について

仁藤：Colaboの活動は、2018年から若年被害女性支援モデル事業という厚労省の事業で東京都の委託先になりました。たった1000万円の委託費で、アウトリーチ、シェルターでの保護と自立支援を、未成年者を保護する場合は24時間の見守りした上でするようにいうものでした。それでも私たちが受けることで若年女性支援の必要性が認識され、公的なお金がつくようになるならと思って受け、足りない分は市民の寄付や民間の助成金に支えられました。3年間モデル事業としてやり、予算が足りないと言いつつ、2021年度

から本事業になって委託費は2600万円になりました。これだけ大幅にアップするのはすごいことだと聞くのですが、児童福祉や女性福祉の世界から見ても、その予算は明らかに少なく、24時間体制など本来必要な支援をやるためには、今のColaboの活動規模でも2億円かかります。私たちは委託先になっても、国や行政に言うべきことは言い続けてきましたが、他の団体をみても、それができなくなっていく組織がほとんどであると感じています。お金のために黙ってしまう大人の事情もわかるのですが、それでは根本的な解決にはなりません。私たちは、自分たちのための活動ではなくて、女の子たちが置かれた状況をよくするために活動しているので、本質は見失わず、言うべきことはこれからも言い続けていきます。そうした姿勢が女の子たちや応援者の方にも信頼されていると思いますが、扱いにくいと思われたり、有識者として会議に呼ばれなくなるということもあります。

また、アウトリーチの必要性をColaboでは訴え続けてきましたが、できる団体が少ないなかで、モデル事業で支援者たちが楽に活動するために「ICTを使ったアウトリーチ」と言い出した団体がありました。Googleなどにお金をかけて広告を出すことをアウトリーチだといい、「その結果HPにアクセス数が何万件ありました」と成果として言います。それは、アウトリーチではなく、広報です。自分から助けを求められる状況にある人たちに相談してもらうためには広報は必要で、公的機関の窓口が周知されれば、支援につながれる人はたくさんいると思います。だから児童相談所などがもっと宣伝することは必要です。

でも、それはアウトリーチではありません。こちらから出ていかなければ出会えない、自分から「助けて」と言えない状態にある人たちにつながるために、直接その人たちに出向いてつながる必要があり、そこをColaboのような民間団体が担っているから、その人たちを公的機関につなげるまでの活動を委託するのがこの事業だったのに、今年度本事業になるにあたって、国の要綱にも、ICTをつかったアウトリーチと書かれてしまいました。それでは本末転倒です。

私たちは、Colaboのような活動が全国に広がるために公的な資金がつくようになればと思ってこのモデル事業を受けました。実際にこうした活動は今、広が

りつつありますが、中身のある活動として広がらないことが多いことにも悩み、責任を感じています。Colaboでは、相談や問題解決を目的としない活動、女の子たち主体の活動であることが大切だと考えてきました。それを「支援臭を消す」などの言葉で説明してきましたが、そうしたらColaboの活動を参考にしたといってきた居場所の活動で、おじさんがマジックをしたり、いかにも世の中の男性たちが「女の子が好きだろう」と考えそうな「女の子らしい」デザインのテントを用意して活動を始めたりしています。Colaboでは、例えばバスカフェのデザインもピンクはピンクでも、女の子たち自身で色味も考えた「つよ（強）ピンク」なんですよ。今まで「支援者」の立場にいた人たちには、そういう違いも考えたことがないし、分からないのかもしれませんが。バスカフェではテントの中も女の子たち自身の場所になるように、例えば、テーブルの内側にスタッフが立ち、外側に女の子たちがいるというようなことはしません。「大人が子どもにしてあげる」という関係性にならないように場づくりも考えているし、大人が出しゃばらないこと、男性は空気になり警備に徹することなどしています。支援したがりの方がいると、スタッフ間でもすぐに注意します。

Colaboでは、出会う少女たちと「支援する／される」関係ではなく、一緒に考え、行動することを大切に、社会を変える主体として捉えて活動してきました。しかし、Colaboが女の子たちと共に活動していることを誤解して、困難な状況におかれた女の子たちを簡単に支援者やスタッフのように扱う団体も増えてきていると感じ、危機感を持っています。その子が主体的に自分の人生を歩むこと、社会を変えるために行動することは容易ではなく、生活の安定、トラウマや心のケアや、信頼できる仲間との出会いなど、長い時間をかけて繋がり、一緒に過ごすなかで、お互いのことを知り、いろいろな状況を共に乗り越えてくるなかで、Colaboでは「私たちは『買われた』展」やバスカフェでのアウトリーチを担う声掛けチームなどが生まれています。女の子たちの当事者性を利用しようとするメディアも多いので、そうしたこともかなり注意深く対応しています。

そもそも日本社会には、若年女性への支援がない状況があるので、Colaboのように虐待や性搾取の

なかにいる女の子たち主体の活動や支援が広がらなくても、もっと手前の状態にある子たちにとっての、よりましな居場所が増えることには意味があるはずだと考えるようにしていますが、制度化したところで、その意義や中身をどう広げていけばいいのか、取り組める人をどのように増やしていくのかを課題として考えているところです。

私は「女の子たちのために」と考えたことはありませんが、「女の子たちのために」「支援しようとする大人」がつくろうとする時点で、Colaboのような活動にはなり得ないのだと考えるようにもなりました。

コロナ禍で、Colaboには、自分から「助けて」と言ってくる人からの相談が急増しています。それは、Colaboが既存の支援とは違い、当事者たちが当事者として必要だと思うことを形にしてきたので、家に帰れず性搾取のなかで生き抜いている子たちより手前の状況にある子たちにとっても、「こっちがいい」と思われるのだと思います。そういう子たちのことも無視できないので、私たちはできるサポートをしています。そういう子たちとの関わりは「支援」だと思います。その部分は、Colaboでなくても、もっと多くの大人が担えるはずだと考えています。

奥田：私は逆に、Colaboがもっと多くの層を支援するグラデーションを持つことを積極的に考えてもいいのではないかと思います。活動は裾野が広がるほど先鋭化していく、例えば三角すいや、富士山のように裾野が広いほど上は高くなる。時間もないし、スタッフも足りない、お金もないと、頂点のはっきりした課題のところだけやりたいけれど、その前に裾野があって、5合目があって7合目があってそして山頂に行く。抱僕は33年目にして、まさにそういう活動になっています。今や活動全体を100としたら、ホームレスという枠組みで動いてるところは3割ほど。あとの7割は障がい者福祉や就労支援、居住支援、刑務所出所者、そして地域で暮らしている家のある困窮者向けの支援。地域で互助会を作り、お葬式までやる仕組みをつくったりしています。

今の時代って社会全体が不安定だから、一瞬でポジションが変わります。昨日までは割と裾野の方でのんびりしていた人たちが、突然先鋭化して出てきてしまうみたいなことがある。今回のコロナで、日本人がこ

れだけストックがなかった、貯金なんてほとんどない、コロナの前だったらギリギリなんとなっていたけど、コロナになって営業自粛と言われたとたんに立ち行かない、家賃が払えない、そういう人が山ほどいたことが明確になりました。だから、グラデーションといえども、その立場は一瞬にして入れ替わることを想定しておかないといけません。

Colaboでもやっているように、助けられた人が助ける人になれる、そういうポジションの入れ替えもすごく大事ですね。いつまでも助けられっぱなしっていう、そうならざるを得ない人もいますけど、互助会を作ったのも、かつてホームレスだったおじさんが、今度は次の人たちのお世話をする事で元気になっていく、そういう作り方をしてきました。抱僕の学習支援では、毎年100人くらいの子どもたちがやってきますが、そこを利用した中学生が大学生になって、今教えにきています。そういう仕掛けというか自然なことなのですが、とても大事ですね。

仁藤：Colaboの活動も、出会った人たちと共につくってきました。だからこそ、その外側の路上や性搾取のなかにいない人たちも「Colaboがいい」と集まってくるのかなと思います。「支援らしい支援」「上から目線の支援」とは違うから。ですが、Colaboがもっと広く、手前の人たちも支援できるように裾野を広げていくというのは、私は逆のことを考えています。それは、今のColaboの活動ですら出会っていない女性たちがいることを知っているからかもしれません。正直、裾野の部分の支援は、他の人でもできるはずなんです。これまでやろうとする人が少なかったけれど、社会の関心が高まるなかで、そこを担っていこうとする人は増えてきていると思います。自分から助けを求めて来る層については、Colaboでなくても、ある意味「支援らしい支援」にも馴染むことができる人が多くいます。コロナ禍でそういう人からの相談が増えたので、Colaboから児童相談所や女性相談所の一時保護所など、公的な施設での保護につなげることができるケースも出てきました。そういう子たちにすら、公的支援のハードルはほんとうに高いのですが、もともとColaboが出会ってきたのは、行政の相談窓口に行っても利用できる支援がないとされてきた女の子たちです。行政にうまくつな

ることができれば既存の支援を利用できる人たちへの支援は、Colaboでなくてもできると思います。そういう支援者の方へも、当事者を尊重する、当事者主体の支援のあり方は、そういう支援者たちに伝え、広めていきたいと思っています。

最近のColaboは、そうした人たちに対する「支援」の部分が注目されて、支援団体として認識されていますが、私たちは当事者運動であることに意義があると考えています。それはColaboにしかできない、Colaboだからできることだと思うんです。よりColaboだからこそできること、Colaboにしかできないことに先鋭化させていくことがまだまだ必要だと思っています。

Colaboでは、この10年間、10代の少女たちと共に声をあげ、JKビジネスの実態の告発や、若年女性支援や法整備の必要性を訴え、市民の認識や制度を変える力となってきました。自己責任論と社会の無理解によって「助けて」と言えない状況にある少女に出会うためのアウトリーチや、シェルターの運営も、10代を中心とする当事者の女の子たちと共に行ってきました。そうしたColaboの活動に賛同する女性のなかには、そうした少女たちと同じような状況にありながら、支援がなく10年、15年と性搾取・性売買の現場から抜け出すことができずに生きてきた女性たちが多くいて、繋がりはじめています。これからのColaboは、そうした女性たちと共に、Colaboのような活動に出会えないまま今も性売買の現場にいる女性たちを支える取り組みを考えていきたいと思っています。

奥田:一緒につくるのが大事ですね。私はホームレスの経験はなく、経験がない人がホームレス支援団体をつくって30年もやっていて、それには常に限界があります。経験者たちがやっていくことはとても大事で、抱撲ではホームレス経験を伝えて、助けてと言っているんだ、生きていいんだと伝え、子どもの自殺対策に活かす「生笑一座」という取り組みをしています。ホームレス経験をしていても、みんな同じ経験をしているわけではないので、自分の経験が全部ではなく、人それぞれではありますが、ピアサポーターの存在は大切です。

仁藤:当事者と共にある、それも対等に、その人たちを尊重しながらという実践は、女性支援の分野では乏しいと思うんです。最近、「当事者を使っていこう」と簡単に考えている支援団体や、当事者にさせればよいと安易に考える行政機関が増えていることにも危機感を持っています。

奥田:抱撲でも、ホームレス経験者の経験からの発想で地域づくりなどをやっていますが、当事者だけでは限界もあります。チームになることが大切ですね。当事者には、当事者にしか言えないことが当然ある。でも、違うものが出会うことが出会いの良さもある。違う人たちが、ひとつの目標に向かって、目の前の人について、この人が生きるために何が必要か、本来あるべき社会ってなんなんだろうと考えていく、大きなビジョンに向かって立場の違う者たちが、一緒に話をしていくことが大切だと思っています。当事者だけが答えを知ってるわけでもなくて、みんなでやろうと。例えば、ピアサポーターを制度化して、そこにしっかりお金をつけるのは大事ですが、包括的なケアを考えると、「その人達に任せましょう」ということにはならない。あらゆるプレイヤーがその目標に向かって集まってくる、それが必要だと思います。

—これからのコラボに期待することを教えてください。

Colaboはトップランナーとして、今やっていることを充実していくことに加えて、現実起きていること、誰にも気づかれないまま、死角のような部分に落ち込んでしまっている存在に気付いて、社会に対して発信していくことができる団体だと思います。新たな課題、現実には起きている問題を発見し、それを国や行政、世の中に訴え、明らかにしていく。そのためには一人ひとりのケアが大切で、一人との出会いから発想し、国に制度を作るように要求する。学者が集まって議論して出した政策提言ではなく、路上で聞いた話に基づいて、代理的提言をする。みんなが気づかず通り過ぎていくような存在を発見して、どうしてそうなっているのかを明らかにしていく役割が、今後一層増えるのではないかと思います。

理事・監事メッセージ

細金和子さん（婦人保護施設慈愛寮 元施設長）

私が施設長を務めた慈愛寮は妊産婦向けの施設なので、妊娠して、お金も家もなくて、どうしたらいいんだろうという究極の状態で、ようやく支援に繋がった人たちがやってきます。もっと早くにつながれたらよかったのにと感じていましたが、婦人保護施設は、女性相談センターが入所を決定した人が来るのを待ち受けているだけなので、出会えていない感覚がありませんでした。『難民高校生』を読んで、支援につながらない人がたくさんいる現実を知り、このままじゃいけないと思いました。

婦人保護事業は仁藤さんとちゃんと繋がっていかないといけないと思い、2014年に仁藤さんの講演会に行きました。そこで、『女子高生の裏社会』に書かれているように、女性たちを搾取する側は「スカウト・店長・オーナー」と役割分担して女性たちに関わっている、Colaboはアウトリーチを担う「スカウト」や、シェルターなどで女の子たちを支える「店長」をやっていて、その裏で支える「オーナー」、応援団になってくださいというお話があり、2016年に理事になりました。

Colaboは公的な支援や医療など、いろんなところ

ろを巡りながらも「問題解決」にはならず既存の支援から排除されてきた若い女性たちと付き合い続けているところが特徴的だと思います。「支援」以前のところで女性たちと繋がって、そこで少しずつできてきた信頼関係、「この人に頼ってみてもいいかな」とか「この人と一緒にちょっとやってみるかな」と思ってもらえる存在になることを担っていると思います。それは他の誰もができることではない。「ちょっと聞いてくれる？困ったことになっちゃってさ」と言ってもらうまでにすごく時間もかかりながら、問題解決を目的としない付き合いを何年もしていることがColaboの意義だと思います。

Colaboは若い女性たちと同じ目線で必要なことが見えているから、届くのだと思います。この目ぐるしさは他に無いというほど、変幻自在に必要な形にどんどん変わっていきこうとしている、その非定型なところが良さであり、面白いと思っています。「その子に届かなければ意味がない」ということでやってきているのが、Colaboと女の子たちの関係の独自性だと思います。

齋藤百合子さん（大学教授）

Colaboの意義は社会的にも、またColaboの活動を求める、支援が必要と思われる少女たちにとっても大きいと思います。社会状況が大きく変化している現在、家族のあり方、学校のあり方、社会のあり方が変化しているだけでなく、本来、子どもを育み、育て、延ばしていく役割を負う家族や学校、そして社会が機能不全を起こしているところがあります。しかし、そうした機能不全という「綻び」は、多くの人が当たり前だと思っている日常生活の中では全く見えません。

幼少から親の虐待を受けて生き延び、10代半ばになって危険から逃れようと家を出て、自宅に帰らない。家族の別離（死別や離婚など）や家庭内暴力の目撃や被害で、傷つき、満たされない思いをどうしていいかわからない。学校に行っても、日常の心身の疲労で勉強に集中できない。など、さまざまな痛みを持っている少女たちにとって、安心して話ができる場所をColaboが提供しているのはとても大事なことだと思います。

監事 中村剛さん（弁護士）

私は弁護士として、民事介入暴力対策委員会の活動で、暴力団対策に取り組んできました。2018年10月以降、バスカフェでの警備ボランティアに参加したのがきっかけで、活動に加わりました。

親、教師、警察などに相談しづらいことがあります。そういうタイプの相談事を持ち込める場所としてColaboの存在は大きいと思います。ただ、事務所で待っているだけでは、そうした相談が舞い込んでくるわけでもありません。Colaboの活動は、熱意あふれるスタッフが実際に街に出て、少女たちに積

極的に声をかけ、相談の前提となる「関係作り」を行っている点で、画期的だと考えています。

生まれ育った環境による不公平が大きくなりすぎているように思います。Colaboの活動のなかで、誰にも頼ることができずに、独りで苦しんでいる若者がこれほどたくさんいるということを知り、ショックを受けています。こうした不公平を1つずつでもいいから解消し、若者がいきいきと自信をもってすごせるような社会にしていきたいです。

ご支援のお願い

私たちの活動は、みなさまのご支援に支えられています。サポーター会員や、シェルターオーナーになって活動継続のための仲間になってください！

サポーター会員

年会費/1口:6,000円

私たちの理念・活動に共感いただいた方に、1口6千円/年からの会費で活動を支えていただいています。

会員の方々の支えがなければ、活動を継続できません。ぜひ入会し、活動を共につくる仲間になってください！

■会員特典

活動報告会へのご招待や、街歩きツアーなどの研修割引

『難民高校生』を贈ろうプロジェクト 1口:2,000円

中高生や少年院で出会う少女たちに仁藤の本を贈っています。1口で1人の少女に届けることができます。

シェルターオーナー

1口:30,000円

1口で1日運営する費用がまかなえます。365日開設を目指し、支援を募っています。

活動資金の寄付

口座振り込み、またはクレジットカードでのお支払いが可能です。

クレジットカード・口座振込による寄付



Colaboに直接ご寄付いただけます。
活動全般を支える資金のご寄付で
応援お願いいたします！

■ゆうちょ銀行 (ゆうちょ銀行〈振替先選択で「記号番号」から振込の場合〉)

記号) 10150

番号) 91829801

名義) イッパンシャダンハウジンコラボ

■ゆうちょ銀行 (他金融機関・ゆうちょ銀行〈振替先選択で「店名」から振込の場合〉)

店名) 〇一八 (ゼロイチハチ)

店番) 018

口座) 普通 9182980

名義) イッパンシャダンハウジンコラボ

■三菱UFJ銀行

渋谷中央支店

口座) 普通 0363448

名義) イッパンシャダンハウジンコラボ

Colaboスタッフ活動スローガン「一人ひとりが、活動家」

私たちは、創設時から、少女たちを「支援対象」としてではなく、共に声を上げ、社会をつくる主体であり、仲間と考えてきました。支援する/される関係ではなく、共にあることを大切に、一人ひとりの主体性を尊重しながら、共に歩き、共に道をつくってきました。Colaboの活動は、当事者運動です。Colaboとつながる少女たちや、すべてのスタッフ、ボランティア、寄付者の方々が、社会を変える当事者だと考えています。支援

に関わるスタッフも、事務局スタッフも一丸となり、一人ひとりが社会を変える当事者として、これからも活動していきます！



講演のご依頼・お問い合わせ

一般社団法人 Colabo

URL <https://colabo-official.net/>

メール info@colabo-official.net

スマホ・携帯は
こちらから

